

## 西宮神社の講社組織に関する一考察

— 神輿奉賛講社の結成と運営を事例に —

劉 勁 聰

A Study on *Kosha* Organizations for Nishinomiya Shrine

— A Case Study of Establishment and Operation of the *Mikoshi Hosan Kosha* —

LIU Jincong

---

広東外語外貿大学 東方言語文化学院 日本語学部 准教授

元神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 客員研究員

連絡先：劉勁聰 〒510420 中国広東省広州市 白雲大道北2号 広東外語外貿大学東方言語文化学院

liujincong@hotmail.com

## 要 旨

筆者は2013年4月から2014年3月まで兵庫県西宮市に所在する神戸女学院大学に客員研究員として在籍した。その間に西宮神社を訪れたところ、講社という存在を知った。講社がどのようなものなのか、また、それがどのように神社の行事を支えているのかに大きな関心を持った。そこで、神社の行事を見学して参与観察を行うとともに、いくつかの講社活動に参加し、講社講員や神職から聞き取り調査を行った。調査を進めると、西宮神社の年中行事・祭典への参加度が一番高いのは神輿奉賛講社であることがわかった。本稿では、筆者自身による調査の結果を踏まえ、神輿奉賛講社がどのように結成されたのか、また実際の組織や活動、運営などの実態について明らかにしたい。さらに、神輿奉賛講社の性格を論じ、講社の今後の発展について私見を述べる。

**キーワード：**西宮神社、講社、結成、運営

## Summary

The author served as a visiting researcher at Kobe College located in Nishinomiya City, Hyogo Prefecture from April 2013 until March 2014. In a visit to Nishinomiya Shrine during this period, the author came to know of what is called a *Kosha* (service association). The author was strongly interested in learning what a *Kosha* is and what it does to support events of the Shrine. Then, while visiting events of the Shrine to conduct participant observation, the author joined some *Kosha* activities and interviewed *Kosha* members and Shinto priests. As the investigation progressed, it turned out that the *Kosha* most involved in the annual events and festivals of Nishinomiya Shrine is the *Mikoshi Hosan Kosha* (Sacred Palanquin Service Association). Based on the result of the investigation conducted by the author, this paper intends to clarify how the *Mikoshi Hosan Kosha* was established as well as the realities of the actual organization, activities, and operations of *Koshas*. Additionally, this paper describes the characteristics of the *Mikoshi Hosan Kosha* and provides the author's view on the future development of *Koshas* in general.

**Keywords:** Nishinomiya Shrine, *Kosha*, establishment, operation

## はじめに

西宮神社は、兵庫県西宮市にある神社である。日本に約3,500社ある、えびす神社の総本社（名称：「えびす宮総本社」）である。地元では「西宮のえべっさん」と呼ばれる。なお、戎信仰については、えびすを蛭子と同一視する説の他にもいくつかの説が存在する<sup>1)</sup>。『兵庫県神社誌』（1937）の「西宮神社」の項には、「古くは西宮戎社夷宮とも称し来りしが明治七年現在の如く西宮神社と改称せり。」<sup>2)</sup>とある。また、西宮神社境内の由諸書（案内板）には、

えびす様の総本社である西宮神社は西宮のほぼ中央に鎮座し平安時代末期には既に高倉上皇の御奉幣をはじめ皇族神祇伯の参拝が著しく社勢極めてせいであったとくに中世以降福の神と崇める信仰が盛んとなり傀儡師の活動や謡曲や狂言を通じて愈々御神徳が扱まっていったとりわけ徳川時代以降商業の発展に伴い海上守護神商売繁盛の神として普く御神徳が発揚し今日では全国津々浦々にわたって多くの人々の崇敬を受けている

と記されている。

西宮神社の表大門（赤門<sup>3)</sup>）の前で一礼して、参道の端に沿い、鳥居をくぐり、社務所へ向かって行くと、授与所の正面に「講社本部」と大きく書かれている木製看板が掛っている。ここから西宮神社には多くの講社があると察せられる。筆者が西宮神社のホームページで調べた結果、以下の講社があることがわかった。

- 日供講社——えびす大神様のご神前に神饌（神様への朝夕のお食事）をお供えし、感謝の気持ち捧げる方々の集い
- 末社講社——西宮神社の境内、境外合わせて十二社の末社の祭典に参列する者の集まり
- 献備講社——献上の品を奉納される篤信家の集まり、献上者の名前を記した木札を挙げ正月・十日戎の間ご神前に供える
- 本恵比寿講——えびす大神様を心のよりどころとしてご祈念される方々の集いで、大神様のご神徳が発揚され、願い事が成就する
- 開門神事講社——西宮神社開門神事（十日戎）を安全に執り行う為有志を集い設立された講社
- 神輿奉賛講社——みこしを担ぎ地域のお祭りに参加することで、地域の青少年の育成、交流を図るために設立された講社

---

1) ウィキペディアフリー百科事典 <http://ja.wikipedia.org/wiki/西宮神社>

2) 兵庫県神職會 1937:321

3) 旧西国街道本町筋の正面に建つ表大門は、鮮やかな朱塗りで、通称「赤門」と呼ばれている。国の重要文化財に指定されている。

神社関係者によると、上記の講社以外にも西宮太々講社、諸国講社と大阪第一招福組がある。これらの講社の中で、西宮神社の年中行事・祭典へ参加度が一番高いのは神輿奉賛講社である。関係者からの聞き取りによれば、神輿奉賛講社については、これまで正式な形でなされた研究や報告は全くないということだった。本稿では、筆者自身による調査の結果を踏まえ、神輿奉賛講社はどのように結成されたのか、その実際の組織と活動、運営などの実態を明らかにしたい。聞き取り対象として協力を得たのは、神輿奉賛講社の岩崎正夫副講長であった。また、西宮神社の神職にも補足取材を行った。西宮神社の神輿奉賛講社に限った研究では、拙著の参与観察で走り回ったルポやインタビューを主とした、文化人類学的なアプローチがあるのみである。

## 1. 神輿奉賛講社の結成

「講」とは宗教・経済・社交上の目的を達成するために組まれた結衆集団のことを言うのだそうである。講という言葉は、もとは、仏教で仏典を講説する「講経」に由来しているという説もある。平安時代には法華経を購読供養する「法華八講」がさかんに行われたが、やがて一般化して自然崇拜にもとづく山神講・龍神講、神社の氏神講・宮座講、経済的な理由から頼母子講、職人達のふいご講などさまざまな結衆集団が生まれる。最も古い講は鎌倉時代、伊勢神宮を参拝する「伊勢参り」のために形成されたと云われる。その後、来世でのご利益を得るために霊験のある神社やお寺に参拝するための講が作られた。講は五穀豊穡を祈願するものから商売繁盛や家運隆盛などさまざまなものがあり、目的によって複数の講が作られていたと言われている。

神輿奉賛講社は、えびす様のおみこしを担ぎ、またおまつりに奉仕することで、伝統文化の継承発展、地域青少年の育成を図ることを目的として、平成20年に設立された西宮神社の崇敬団体である。講社内の子ども会員（中学生以下）の集まりは太鼓会と呼ばれている。

神輿奉賛講社の事業内容は西宮神輿奉賛講社規約でつぎのように定められている。

- (1)西宮まつりでの神輿の奉昇。
- (2)各地域神輿保持団体の親睦と交流。
- (3)神輿に関する伝統文化事業の継承と推進。
- (4)神輿に関する伝統文化事業の広報啓発。
- (5)神輿を通じての青少年の育成。
- (6)その他本会の目的を達成するために必要なこと。

上記事業内容から見れば、“お神輿を担ぐ”と“青少年の育成”という二つのキーワードが浮上して来た。関係者によれば、神輿奉賛講社を結成する中心人物は副講長の岩崎氏であった。岩崎氏は平成12年に大阪の八尾市から西宮に移住して来た。氏は祭りが好きで、阪神間の祭りにもよく出かけている。神社のお神輿担ぎに熱心だった。また、氏は神社近所の親たちと平成18年ごろから青少年の育成の活動を行った。岩崎氏は講社の結成のきっかけについて次のように話した。

「講社の前身は青少年の育成のために近所の親たちが組織したクラブでした。クラブ名は特にありませんでした。クラブ活動では地域の小、中学校へ行ってバーベキューやお餅つき大会などのイベントを行います。神社のお祭りにもよく参加しています。そこで約束をどう守るとか、苛めはあかんとか、子供に一つずつ言ってあげます。例えば、出来たお餅に大きいものと小さいものがあつたら、大きいものを人にあげて、自分が小さいものを食べます。これは日本人の昔からの謙虚な気持ちの現れです。それを本当は親が教えなければならいけど、今の若い親、僕らもそうですけど、教えない親が日本にすごい多いですね。だから、学校で教わらないこと、家で教わらないことを僕らはその祭りを通して、教えています。例えば“ちゃんと挨拶はしましょう”、物を貰ったら“ありがとう”と言いましょ。これは一見やさしいことですが、できていない子供がたくさんいます。この青少年教育はやはりわれわれ地域の大人たちの務めです。そして、それに賛同してくれた人たちが今の神輿の講社講員です。平成18年ぐらいの時に神社から“布団太鼓を復興してもらえへんか”という話があつたんで、それと僕らがやっていた活動「青少年指導育成」というのが、そこで一つになったのです。」

(2013年8月28日に岩崎正夫氏が経営している店「祭」にて)

上記の聞き取り調査から、神輿奉賛講社は青少年の育成のために、クラブの組織を作ったことが分かった。講員になると、祭りだけではなく、神社のその他のことや地域のボランティア活動などにも関わる。このことは、子供たちと地域を結び付けるだけではなく、地域の活性化にもつながるのだという。

## 2. 神輿奉賛講社の組織と運営

神輿奉賛講社は正講員（高校生以上）と子供講員（中学生以下）をもって構成されている。子供講員は西宮神社神輿奉賛講社太鼓会と称する。現在講員数は40人ぐらいである。そのうち、大人が20～30人ぐらいで、子供の講員が15人ぐらいいる。講社の参加資格は制限がなく、講社の趣旨に賛同する人ならだれでも申込書を記入すれば入講できる。正講員は講金を納入しなければならない。年額1千円である。子供講員については会費は不要であるが、必ず保護者が正講員として入講する事としている。講員の職業はサラリーマンが一番多く、自営業者と公務員も少数いる。講員の地域性については、岩崎副講長が次のように語っている。

「発足当時はこの氏子地区、四地区<sup>4)</sup>に限るっていうことがあつたんです。でも、今、氏子地区、四地区で集めると集まらない。僕の知り合いで大阪とか、神戸とかからも講員をお誘いはするんです。当日は、お神輿を担ぐのにそんなところから来てもらいます。」

(2013年8月28日に岩崎正夫氏が経営している店「祭」にて)

講社の役員について、西宮神社神輿奉賛講社規約には次のような規定がある。

---

4) 西宮神社の氏子区域、現在西宮市の行政区域（浜脇、用海、安井、香檀園）の四地区である。

- (1)講長 1名
- (2)副講長 2名 但し、内の1名を太鼓会の責任者とする。
- (3)理事 若干名 事務局を担当する。但し、理事の内西宮神社職員1名は常任とする。
- (4)顧問 若干名 但し、顧問の内西宮神社宮司は常任とする。
- (5)会計 2名 本講員、西宮神社職員より各1名とする。
- (6)監事 3名 但し、理事及び役員を兼ねることはできない。  
また本講員より2名、西宮神社職員より1名とする。
- (7)庶務 若干名 本講員より若干名、西宮神社職員より1名とし、本講員の内1名ないし2名を太鼓会担当とする。

役員の選出について、役員は役員会において選出し総会の承認を得、講長が委嘱する。但し、西宮神社宮司は顧問として常任し、会計、監事、庶務の西宮神社職員枠（各1名）及び常任理事1名は西宮神社宮司から選出するものとする。役員の任期は2年とする。但し、再任を妨げない。補欠役員の任期は残任期間とする。

講社組織については、岩崎副講長が次のように語っている。

「講長の任期はなく、神社から決められています。副講長を含む役員の仕事は二年となっています。総会の時に選挙で決めます。僕の考えでは、組織の中のことを、みんなに知ってほしいから、いろんな人に順番に変わってもらってるんですけど、二年毎に、新しい人に役員になってほしいと思っています。日本では役職につくと、会議に出てくるんですよ。役職がない一講員の時は会議にあんまり出ずに、お祭りの当日だけ参加しに来ます。例えば総務という役職をお願いすると、会議にも出てきて、みんなに中のことを知ってもらったりできます。」（2013年8月28日に岩崎正夫氏が経営している店「祭」にて）

神輿奉賛講社の活動のメインは毎年9月の西宮まつりのおこし担ぎであるが、西宮神社の年間行事に合わせ、焼そば等の出店など、様々な活動を行なっている。以下は神輿奉賛講社の宣伝チラシに書いてある年間活動である。

#### 神輿奉賛講社年間活動

- 4月 ◎定例総会
- 5月 ◎西宮太々講社神楽祭
- ・焼きそば店などの出店
  - ・布団太鼓台<sup>5)</sup>展示
- 6月 ◎御輿屋祭（おこしや祭）<sup>6)</sup>
- ・神輿奉舁、行列奉仕

5) 担ぎ棒の付いた本体（太鼓台）の上に赤いふとんを5段重ねたおみこしである。本体の中に太鼓を取っており、子どもが数人乗り込み、太鼓を叩く。

6) 西宮神社では、えびす様がお越しになられた由来に因んで、毎年6月14日に本殿の東約500mにある本町の御輿屋（おこしや）跡地までえびす様を神輿にのせて担ぎ、おこしや祭を斎行している。

- 7月 ◎夏えびす七夕天の川
- ・布団太鼓台展示
- ◎子ども相撲大会
- ・相撲大会の運営奉仕
- ◎あらえびす夜祭り
- ・布団太鼓台展示
  - ・焼きそば店などの出店
- ◎夏えびす万燈籠祭
- ・布団太鼓台展示
- ◎住吉神社<sup>7)</sup>夏祭（舟だんじり）
- ・布団太鼓台巡行
  - ・焼きそば店などの出店
- 9月 ◎西宮まつり
- ・神輿奉昇
  - ・布団太鼓台巡行
- 11月 ◎西宮市民まつり
- ・布団太鼓台巡行
- ◎七五三詣社頭奉仕
- ・着ぐるみ奉仕及び風船の配布
- 12月 ◎忘年会

筆者は2013年6月から2014年3月まで神輿奉賛講社の活動のすべてに参加したが、上記に載っていないものとして正月の全講員昇殿参拝と十日戎の開門神事福男選びの安全サポートがあった。これらの活動は必ず西宮神社の行事に付随しており、神輿奉賛講社が独自の活動を行っているわけではない。

神輿奉賛講社の運営については、講社役員と神社職員を中心に行っている。事務局は社内内に置き、月一回程度の会議がある。会議の内容は神社の行事の打ち合わせである。講員は日中別の仕事に従事しているので、会議の時間は祝日、週末、夕方が多かった。以下は筆者が参与観察した西宮市民まつりの準備会議の様子である。

#### <西宮市民まつりの準備会議1>（2013年10月5日、18時）

「当日、筆者は午前から西宮酒ぐらルネサンスと食フェアに参加するために西宮神社を訪れた。夕方、帰際に社務所に寄ると、神輿奉賛講社の副講長岩崎氏と神職の宮川氏が膝の上に乗せている地図のようなものを見ながら話している様子を見た。近づいてみると西宮市民まつりの準備会議をしていることがわかった。この時、講員の岩崎夫人もやって来た。しばらくしてから講員の田見氏もやって来た。四人が第38回西宮市民祭だんじり経路図を見ながら、道路交通状況、布団太鼓を担ぐ人数、各交差点に着く時間、駐車場の問題、トイレの問題などを議

7) 西宮神社の境外末社である。

論している。副講長の岩崎氏は布団太鼓を担ぐ人数を確定していないため、当日人数が多ければ二台を出す、少なければ一台を出すと言った。岩崎夫人は途中で休憩する必要があるかどうか、飲み物の準備が必要なのかと言い出した。田見氏は今年の巡回路線は例年と何か違うかを確認することが必要と述べた。最終的に確定したことは、飲み物は神輿奉賛講社が買うこと、まつりの5日前に布団太鼓を担ぐ人数、昼の弁当50個も講社の会計より支出することであった。未確定事項は10月18日の会議に持ち越しになる。」

#### <西宮市民まつりの準備会議 2> (2013年10月18日、19時)

「19時頃、会議の出席メンバーが続々と西宮神社の社務所に集まってきた。メンバーは西宮市にある生瀬皇太神社、越木岩神社、福応神社の各だんじりリーダーで、西宮神社では若えびすのリーダー、神職二人、神輿奉賛講社役員の本庄氏と大槻氏であった。会議の進行役は西宮市民まつり協議会のだんじり担当で、生瀬青年団の方であった。この日は最終会議なので、各社から準備状況を報告した。神輿奉賛講社では、本庄氏が母校の高校生二十人を呼び、布団太鼓を担ぐことが確認された。」

神輿奉賛講社の財政面において、収入は講金、神社からの補助金、神社行事の時の出店の利益である。大人講員の講金は千円で、年間二、三万円である。神社からの補助金については、岩崎副講長が次のように語った。

「神社からの補助は活動金という形でいただいています。頂いた補助金は、総会の時の費用で半分以上がなくなっちゃいます。総会は50人ぐらい参加して、会議は1時間ぐらいで終わります。終わってから2時間ぐらい懇親会があります。」

(2013年8月28日に岩崎正夫氏が経営している店「祭」にて)

神社行事の時に出店するのは焼きそばである。神輿奉賛講社の講員たちが材料を仕入れて、祭りの時に神社境内で焼きそば、とり唐揚げ、生ビールを売っている。次は岩崎副講長のインタビューである。

「西宮神社の年間行事に合わせ、焼きそば等の出店は年4、5回で、1年間の利益は十万円ぐらいで、そんなに儲かっていません。神社からも儲けなくていいと言われます。子供たちが喜んで帰ってくれたら、それで十分です。むしろ儲けて欲しくないでしょう。あくまでも僕らは神社の団体としてお店を出させてもらうから、商売を目的で出しているわけじゃないのです。出店の利益は講社に貯めて、布団太鼓を修理したりとか、半被を買ったりとかしています。」 (2013年8月28日に岩崎正夫氏が経営している店「祭」にて)

講社運営の課題は人手が足りないことである。以下は岩崎副講長からの聞き取りの内容である。



「講社運営の課題は講員の増員です。講員を集めるのが難しく、組織の拡大化が一番の問題です。日頃一回だけのお手伝いはたくさんいますが、年間を通して行事がいっぱいあるので、ずっと携わってくれる人はなかなかいません。講員募集や講社の宣伝は普段しています。例えば神社や小学校で、この辺の地区の祭りといったイベントの時に講社の紹介をして、その中で講員募集をしています。特典にこんなのがありますっていうふうにそのステージ上で話をさせてもらっています。祭りや講社の打ち合わせの会議の案内をしていますが、各自の都合もあるので、全てのものに参加していただきとは言えません。その中の一つか二つでも参加していただけたらありがたいです。」

(2013年10月23日に岩崎正夫氏が経営している店「祭」にて)

神輿奉賛講社の運営が地域団体だけではなく、神社職員も積極的に関与している。西宮神社神輿奉賛講社規約から見れば、講社役員の構成は神社職員がかなりのウエートを占めている。顧問に西宮神社の宮司が常任し、理事・会計・庶務・監事も各一人の神社職員が担当している。講社の活動資金も神社が補助している。これらのことから、神社は講社組織化の核になっていると言えよう。

### 3. 考察——神輿奉賛講社の性格

講集団の性格は本質的に特殊宗教集団的であるとしても、“講”と呼ばれているものの実態は、必ずしも常にそのようであるとは限らない。講集団の実態は甚だ錯綜し、その分類も様々であった。『神道要語集 祭祀編』(平成二十五年発行)によれば、講の発生の順序に従って、(1) 仏教寺院の講、(2) 神社の講、(3) 教派神道の講、(4) 民間信仰の講、(5) 同業者並び経済的の講、の六つに分けられている。神道の講集団を取り上げてみると、伊勢講・三峯講・金刀比羅講・大社講の如き代参講または参拝講は、一応、講社組織の本来的性格である特殊宗教団体的(心縁集団的)様相が著しいと言える。これに対し、所謂氏子集団の講は地縁を、民間信仰の集団は血縁および地縁を、結合の媒介とするものが多い。しかし、そうした講結合の因子も、決して単純なものではない。そこには、本来の心縁の要因以外に、地縁・血縁・身分階層・性別・年齢・職業等の一つまたはいくつかが複合して、講結合の因子を構成している。また、米山俊直(1979)は天神祭の講社を性格を基にして地縁と社縁に類型化した。社縁で結ばれた講社は同業者組合あるいは単一の会社組織を母体とする講社である。

聞き取り調査によると、神輿奉賛講社の議員のほとんどが氏子ではなかった。西宮神社の氏子区域に住んでいても、近年移住して来たものが多い。議員の宗教信仰はキリスト教、天理教、仏教(浄土真宗)、日蓮正宗など様々であった。また、議員の職業も公務員、サラリーマン、自営業者、退職者、主婦などいろいろであった。これらのことから見れば、筆者は、神輿奉賛講社の結合の媒介は地縁・血縁・心縁・社縁ではなく、むしろ約縁なものと考えたい。人類学者綾部恒雄は著作(1995)の中で約縁集団について次のように述べている。「約縁集団などというとむずかしく聞こえますが、要するに血縁関係や地縁関係とは異なる原理で(つまり一定の約束のもとに)結びついている利益集団で、一般に結社と呼ばれるものを指しています。結社

と呼ぶのは『何らかの共通の目的や関心を充たすために、一定の約束のもとに、基本的には平等な資格で、自発的に加入した成員によって運営される。生計を目的としないパートタイムの私的な集団』のことです。約縁集団の“約”は契約の“約”を意味しており、この種の集団の結合のきっかけが、基本的には共通の目的や関心を充たすための約束の原理によっていることから取られたものです。』<sup>8)</sup>

現在は昔のように、氏子組織が恒常的な宗教団体として存続しているケースは稀である。社会の世俗化と流動化により事実上解体しているところが多い。したがって、神社の行事に際しては、氏子組織や商店街の商工団体などによって活動する様々な地域団体が必要になる。

## 終りに

本稿では神輿奉賛講社の結成・組織・運営を考察し、その実態を明らかにしてきた。神輿奉賛講社は地域の青少年育成を指導するクラブとして始まり、西宮神社から布団太鼓の復興という働きかけがあり、結成された新講社である。講社の性格は神社が核となる約縁集団であろう。また、講社の運営課題は人手と活動資金が不足していることである。ここで、神輿奉賛講社の今後の発展について、私見を述べてみたい。一つは、現在、高齢少子化問題を抱えている日本に於いて、いろいろな部門で人手不足に悩まされていることである。外国人を活用するのは一つの解決策であろう。近年、日本各地の祭りにおいて外国人が参列していることがよく見られ、祇園祭でも外国人が山鉾を曳いて注目を浴びた。在日外国人に神輿を担ぐことに協力してもらえれば、ある程度人手不足が解消できる。在日外国人にとっても異文化コミュニケーション理解や、日本の生活に溶け込むいいチャンスである。もう一つは、日本の神輿担ぎは無形世界文化遺産を申請すべきである。日本の祭りは地方によって特徴が違うが、大部分のまつりに神輿が登場してくる。日本全体の神輿担ぎを無形世界文化遺産に登録できれば、文化庁に無形文化財として認められ、補助申請もできるだろう。

## 謝 辞

神輿奉賛講社の聴き取り調査の際にお世話になった西宮神社の神職の方々、並びに神輿奉賛講社の講員の方々に心からお礼を申し上げます。併せて本研究に助言・協力していただいた神戸女学院森孝一院長、神戸女学院大学飯謙学長、小松秀雄先生、建石始先生に感謝を申し上げます。

## 付 記

本研究は2013年広東外語外貿大学科研プロジェクト(13G8)「日本の神社組織の人類学研究」の研究成果の一部分である。

## 参考文献

兵庫縣神職會(1937)、『兵庫縣神社誌 上巻』、兵庫縣神職會。

---

8) 綾部, 田中 1995:152-153

- 桜井徳太郎 (1972)、『講集団成立過程の研究』、吉川弘文館。
- 米山俊直 (1979)、『天神祭』、中央公論社。
- 小松秀雄 (1994)、『生田祭の社会学的研究 (1) ——生田祭の輪番制と岡方の運営方法——』、神戸女学院大学論集、第41巻第2号。
- 綾部恒雄、田中真砂子 (1995)、『文化人類学と人間』、三五館。
- 森本一彦 (1997)、『社会関係としての講集団の組織化—二つの岩室村の伊勢講』、『日本民俗学 第212号』。
- 西宮神社 (2003)、『西宮神社』、学生社。
- 神道文化会 (2013)、『神道要語集 祭祀篇』、神道文化会。

(原稿受理日 2015年2月21日)